# 森の木魂(こだま)

2023年1月24日発行 第9号

国次	

地球で生きのびていく使命 ・・・・・・・・・・・1	・中倉山の「無言の語り木(ブナ)」に耳を傾ける8
「日本鉄道福祉事業協会」の新しい活動2	・私の身体に宿る森に寄り添うこころ 9
里親植樹が教えてくれた森に寄り添う心得3	・生物社会に生きる心得 10
お茶会を開催しました 4	・森に寄り添った余生に感謝11
イベントの参加した森ともからの寄稿6	<ul><li>・森は友だち・編集後記・・・・・12</li></ul>

# 地球で生きのびていく使命

2023年、年頭に当たり、森びとプロジェクト会員の皆様に謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、この国が大きく揺らぐ事態に振り回された一年でした。コロナ禍の中、7月の安倍晋三元総理暗 殺とその背景に旧統一教会による自民党汚染があることが顕在化しました。岸田内閣はこの事態から国民の 眼を逸らすために防衛費 43 兆円に拡大することに加え、既存原発の 60 年稼働と原発新増設と原発回帰への 大転換という政策変更で幕を閉じようとしました。

私が森びとプロジェクト代表を引き受ける決断をした背景には、東日本大震災と東京電力福島第一原発事 故で6万人以上もの市民が市外へ避難を余儀なくされ520人もの災害認定死者を出してしまった南相馬市の 元市長として、二度とこのような事態を起こしてはならないという決意があってのことでした。南相馬市は 「脱原発都市宣言」をしました。原発は人類にとって安全なエネルギーではないことが明らかなりました。 岸田政権の原発回帰政策は人類生存に対する挑戦です。脱炭素とか温暖化対策とも相容れない政策です。

森びとプロジェクトの活動の目的は、「地球上のすべての生命にとって欠くことのできない『いのちの 森』をつくる活動(事業)を行い、地球温暖化防止に努め、有限な資源の価値を最大限に生かし、原発や化 石燃料に頼らない人と自然の共生を目指す。この活動を通じて自然環境と人間の命を大切にする心を育み、 志を同じくするすべての人々と連携を図る」と規約に掲げています。人間がこの地球上で生き延びていくた めには政治が軍拡や原発を止め、温暖化を防ぐことが必須です。地球の人口が80億人になっているこの危 機的状況下で、山と心に木を植える私たちの活動は「宇宙的な使命」であると思います。

今年は会員の皆様と森びとプロジェクトの理念を共有する人びとと連携し、活動する仲間を増やしていき ましょう。皆様のご健勝とご活躍を祈念して挨拶と致します。

森びとプロジェクト代表 櫻井勝延

会計監査員 (無職 (会社員

大山博延 小林 大野昭彦 井上 清 小黒伸也 桜 井勝 水 敬 康 卓 延 (会社員) (会社員 (会社員) (元林野庁職 (植林ボランティ (南相馬市市 員

島野智之 倉澤治雄 中村幸人 川端省三 (元林野庁職員 (東京農業大学名誉教授 (法政大学教授 (科学ジャーナリ (衆議院議 員

、 スト

**本年もよろしくお願いいたします。** 【運営委員会】 **尚橋佳夫** (森びと探究者)





# 温暖化にブレーキをかける活動

# 「日本鉄道福祉事業協会」の新しい活動についてお伺いしました

昨年 9 月、森びとプロジェクトの事務所が入居する目黒さつきビルを管理している一般財団法人日本鉄道福祉事業協会が新たに定款に「労働者が安心して暮らせる環境を守るための森づくり事業」を新たに付け加えて内閣府に申請・認可をされました。気候危機下で社会的にとても大切な時期に森びとと共に"森づくり"を事業展開して下さることになりました。定款の変更と認可をいただくために 1 年間にわたり努力を重ねて下さった事業協会・田城代表理事に話を伺いました。



田城郁代表理事(右)

### ■森づくり事業を始めようとしたきっかけは?

当法人は、労働者・社会的弱者の福祉向上に関す る事業を行い、その地位の向上に寄与することを目 的としています。そのための公共事業として「労働 資料館事業 | 「雇用推進生活支援事業 | を行ってい ます。近年、地球温暖化により世界中で甚大な災害 が多く発生。日本でも巨大化する台風、記録的な豪 雨により河川の氾濫、土砂崩壊が発生し、家屋や工 場、農地が浸水、鉄路の寸断、突風、竜巻など人々 の暮らしを脅かしています。また、35℃を超える猛 暑は炎天下で働く労働者を苦しめています。これら の気候変動は、「森林破壊」も大きな原因の一つと されています。現代において、森林保護と育成は、 地球・人類にとって緊急かつ重要な取り組みです。 当法人が始める「森づくり事業」は、労働者が安心 して暮らせる環境を守ることを目的とすると同時に、 法人としての社会的責任を果たそうとするものです。

#### ■具体的な活動を教えてください。

「森づくり」には、多くの経験と知恵が必要であり、それを担う人材の育成が重要課題です。当法人は「森づくり事業」の推進にあたり、この間多くの植樹活動や「森づくり」の重要性を社会にアピールしてきたことに加え、宮脇方式により非常に高い活

聞き手:運営委員 小林敬

着率を誇る「森びとプロジェクト」と連携・協働していく方針です。最初の足掛かりとして、現在「森びとプロジェクト」が行っている「りんねの森」について当法人からも人材を派遣し、協働参加していきます。また、「森づくり」人材育成に向けた研修会、シンポジウム、講演会の定期的な開催を目指し、そのためのノウハウや企画等については森びとプロジェクトから学んでいきます。

#### ■社会への発信方法についてお聞かせください。

当法人のホームページに新たに「森づくり事業ページ」を開設しましたので、「りんねの森」で得た「樹木の成長過程、調査実績」の活動報告やシンポジウム等の開催案内などについて随時更新していきます。加えて「地球温暖化の現実」「人が生きるための森の重要性」等について広く発信していきます。

# ■森をつくり、守る意識を育むための取り組みに ついての考え方は?

かつての鉄道は石炭を燃料とする SL からスタートし、近代化の過程では過度な森林伐採による枕木などの多くの木材によって支えられてきました。これらが自然環境に大きな変化をもたらし、今や地球温暖化の一つの要因になっています。このことを現代の鉄道労働者にも訴え、「森づくり意識の醸成」を発信していくことは重要な課題です。また、厳しい環境に晒される大都会でも脈々と生き抜く植物の生命力から、人間が学ぶことが多くあります。現在、森びとプロジェクトが企画している「エコ散歩」は、身近な所から市民の意識を変え、「森づくり」を担う人材づくりにも非常に有効だと感じており、当法人としても来年度以降、その企画・運営に参画していきたいと思います。



# **温暖化にブレーキをかける活動** 里親植樹が教えてくれた森に寄り添う心得



臼沢西の森で作業後の1枚

2021年5月から始まった「里親植樹」は2022年 10月をもって終了しました。12カ月間で延べ658 名、3団体の方からの申し込みがあり1,600本(補植を含む)の苗木を植えることができました。改めてご協力に感謝申し上げます。

この森づくりは、足尾で植樹をしたいがコロナ感染防止による行動制限や自粛等で現地までは行けない方々のために、苗木を森びとスタッフやサポーターが代わって植えるというものでした。その苗木には温暖化にブレーキをかけたいという願いや森を元気にしたいという思いが詰まっています。私たちの気持ちの中には「参加者のそれぞれの願いと思いを裏切ってはならない」ことがひとつの重石としてありました。また、「臼沢西の森」の東側にある「臼沢の森」は 2005 年から育てられていることからすれば、「臼沢西の森」に植樹することには自信がありました。とは言っても、森びとスタッフ、サポーターの胸の内は「失敗はできない」ということであったと思います。私自身がそうでした。

昨年植えた苗木の樹高は1メートルを超えるほどに育っていますが、里親植樹で身に沁みたことは森に寄り添って生きていくには"過信と油断が大敵だ"ということでした。夏の足尾では気温が 37 度になりました。猛暑日で土はカラカラに乾燥しているにもかかわらず幼木を植えようと考えていた私たち。幼木が根を張ることが極めて難しい環境と、里親に参加してくれた方々の思いや願いを裏切らないという考え方に立ち返り、7月と8月の植樹は9月に延期しました。恥ずかしいことですが、足尾の猛暑日

も世界的な気候危機に無関係ではないという当たり 前のことを忘れていたようです。

春には、100 本以上の苗木の幹がウサギに食べられてしまったことを発見しました。この事を振返ってみると、"幹は食べられても根が残っていれば芽は出る"という「臼沢の森」の経験が無意識のうちに私の獣害対策の出発点になってしまっていたようです。獣害リスクを軽減する予測と対策はできますが、その確実性は見えない生物たちの都合に合わせるほかありません。私たちは「枯らさない」と頑張ってきましたが、人間の"過信と油断"は生物社会には通じないということを改めて教えられました。

「里親植樹」の現場では、石ころだらけの急斜面に生えたススキ等の草を刈り、製材過程で切り落とされた板(甲羅板)で黒土を土留めし、この板と間伐材の杭で作業用の階段も作りました。長さ2メートルの甲羅板と鉄筋を運び揚げました。その量は、土が約2,500袋、甲羅板は約500枚、鉄筋は1,000本でした。古希世代と還暦世代のスタッフとサポーターが人力でこの作業を行ってきました。

責任者の私は、皆さんに休憩をお願いするのですが、強者の皆さんは言うことを聞いてくれませんでした。しかし、強者たちの皆さんには「怪我や事故は自己責任でやっていく!」という意識が発揮され、怪我、事故等が無く植樹を終えることができました。 里親植樹に応えてくれた皆さん、ありがとうございました。

森づくりスタッフ 加賀春吾



# 温暖化にプレーキをかける活動

# 「お茶会」を開催しました

森びと各県ファンクラブは、地球温暖化防止!「脱炭素社会」に向けた活動(啓発活動)として「お茶会」を開催。地域の方々と私たちは、豪雨や猛暑などの被害や不安を出し合い「気候危機下の生活」について意見交換を行いました。1都5県で開催した「お茶会」、「お茶会開催に向けた学習・討論会」を振返ってみました。

副代表 清水卓



栃木県ファンクラブ

### ●東京都ファンクラブ

開催日:2022年10月22日(土)

都心における自然災害の状況について報告。2019 年台風 19 号では武蔵小杉駅周辺で「内水氾濫」が発生、高層マンションが冠水しライフラインがストップするなど温暖化の影響を感じていることや設備の検討や防災意識の向上に対する意見が出される。

#### ●栃木県ファンクラブ

開催日:2022年10月23日(日)

那須疎水を利用した水力や太陽光発電の電気を地域で消費することや環境などの社会活動をボランティアからビジネスに転換していくことなど、持続可能な街づくりへの熱意。子供たちが地域の自然環境を守るボランティア活動に参加し、なんで自然を将来に残すのかを考え、学ぶ場を与えることが非常に意義のあることの意見が出される。

#### ●千葉県ファンクラブ

開催日:2022年11月12日(土)

身近な異常気象から自分が感じる温暖化について 討論。和田浦でのクジラの解体数が減少、海水温の 上昇と海流の変化に要因があるのではないか。買い 物では石油由来の容器に入った物は買わない、地産 地消に本腰を入れていくべき。若者たちの意見を国 会議員は受け止め温暖化防止に生かしていくことが とても大切等の意見が出される。



千葉県ファンクラブ

# ●秋田県・福島県ファンクラブ、南相馬市鎮魂復興 市民植樹祭応援隊合同

開催日:2022年10月23日(日)

気温・海水温上昇による生態系の変化や豪雨被害の状況、行政への「温室効果ガス排出ゼロ」への要望や請願書採択の取り組みについて報告。防災やハザードマップの点検、自分でできるエコ対策など地球にやさしい環境づくりにも目を向ける大切さが出される。

#### ●宮城県ファンクラブ

開催日:2022年10月29日(土)

地球温暖化による暮らしの変化や、人間の命を守る循環システム・森の大切さについて学習。異常気象に対する危機感を出し合い、次世代の生活に何かしなくてはならないという気持ちを共有する。

#### ●神奈川県ファンクラブ

開催日:2022年11月6日(日)

気候危機の現状と温室効果ガス削減の取り組みについて学習、議論。身近な所で火力発電所の環境問題と向き合う漁師がいることを知り、現実を学び行動することの大切さを実感。悩むだけではなく、話し合うことで前に進む知恵が生まれた。





# お茶会を振り返って

### ①地域の方々と社会運動をつくりだす一歩

各県ファンクラブは、森づくりや海の環境を守る活動、平和を希求する活動、環境教育に取り組む教諭や学生、地方議員、JR東労組組合員・OBの方々との出会いを通じて、気候変動による自然環境の変化や不安を共有することができました。

#### ②進路は希望の社会を描きだす

世界の人々は気候危機下での生活の恐ろしさを初体験しています。その上、NATO+連携国とロシアとの戦争と収まらない新型コロナウイルス感染のパンデミックの生活を強いられています。世界中の人々が混迷している中で、各県ファンクラブが一歩前に踏み出したことは、森に寄り添う希望の社会を描く小さな波紋をつくりだしたといえるのではないでしょうか。

### ③心をひとつにする地域での付合い

「お茶会」を開催するにあたり、各県ファンクラブの皆さんは地域の方々と心をひとつにできるのか、そのためにはどのような話を提案すればよいのか等を悩みながら準備を進めました。その過程では、地域の方々への呼びかけを躊躇したり、提案する地球

温暖化関連の認識不足が問われました。また、「お茶会」では「排出を削減する技術開発」、「環境問題をビジネスへ」という経済成長という側面だけが話の中心になり、経済の脇に温暖化防止があるという意識が定着しているのかと感じられました。二酸化炭素の吸収源である大地の森や海の森の衰退は人間の活動の結果であり、それが私たちの生存基盤の危機へつながっている危機感を共有できる話合いをつくり出す難しさを体験しました。

森びと運営委員会としては、「お茶会」づくりに悩む県ファンクラブとの連携が任せきりとなってしまいました。千葉県の「お茶会」では、「森びとプロジェクトからも参加してくれると思っていた」という声が地域の方々から出されました。何事も現場に入り、地域の方々から受け入れられる人間関係をつくりだすことの大切さを教えられました。

昨年 11 月に開催された COP27 では、地球温暖化の原因でもある「化石燃料削減」について議論が進展しませんでした。今年も猛暑や豪雨、豪雪災害に怯える生活が予測されます。"森と生きる生活スタイル"を基盤にした希望の社会を見つけ出していければと願い、今年も「気候危機下の生活を考えるお茶会」を各県でつくりだしていきたいと思います。



# 森の仲間たち

# イベントに参加した森ともからの寄稿

2022 年も森びとイベントに参加された方々がたくさんいらっしゃいました。今回はその中から、10 月 23 日に南相馬でのお茶会に参加された秋田市議の工藤さん、11 月 3 日に「中倉山のブナを元気にする恩送り」に参加された大垣さん、11 月 5 日に創立 20 周年の記念植樹を行った NPO 法人エコメッセを代表して理事長の大嶽さん 3 名の方に寄稿頂きましたのでご紹介します。

#### ●福島・南相馬でのお茶会に参加して

私は、3.11 事故以来、それまでに関わった運動を 根本的に見直すことに迫られ、重い蓋が 覆い被った ような意識で過ごしてきた。どうしてもフクシマに 足を向けらないという日が続いた。事故から 2年後 に訪れた機会に行った「立ち入り制限区域」の眼前 に広がった光景は、私が思っていた以上の悲劇的状 況であり、現実に愕然とした。「私の反原発運動」は、 果たして何だったのだろうかと、自分を責めた。運 動を企画する役割を担っていたので、軽々しくやっ てきたつもりはない。しかし、事故が現実になった とき、「私の運動」、「自分の思想」のアリバイにすぎ なかったのではないかと自己批判した。運動である 限り、社会的に影響を与えることが目的にあるが、 反原発運動は、推進派の中核にある政府、電力会社 が一体となった自治体、住民への買収の厚く強固な 壁を破れず、結局「反対し続ける」ことに終わり、 欠陥原発は野放しされ、あのような惨事が起きた。 そして「反対運動」で指摘し続けたすべての事象が 具体的に起きることになった。私の重い気持ちを救 ったのは、福島現地で旧知の友人たちが自らを省み ず被災した人たちの相談のために東奔西走している 姿であり、そこには昔の闘士の姿でなく、悩み苦し む一人の人間として被災者に寄り添い受け止めよう としている姿であった。また、チェルノブイリ原発 事故の医療支援と交流を長く行ってきた一人の医師 の無償の活動であった。この姿は、沈む私の心に光 をさした瞬間であった。現実を避けずに向き合い未 来へどう向かっていくのかを、ようやく考える気持 ちになった。

今回は、森びとプロジェクト秋田県ファンクラブの皆さんのお誘いで、南相馬市で応援隊及び福島県ファンクラブとの交流。そして、復興がどのように進んでいるのかと、いのちを守る森の防潮堤づくり

の現状を見るためであった。震災後、2回目のフク シマ。その中で、同居家族4人全員を津波で失った 方のお話を伺った。内容は、初めて知ることばかり であった。その中で、特に言われていたのは、自然 災害は防ぎようがないこと。自然災害を防ぐという 発想自体に人間の愚かさがあるのではないかとさえ、 お話を伺いながら考えた。むしろ大事なことは、避 難路をきちんと確保しておくことの重要性であった。 経験をきちんと継承し、逃げることを考え、その時 間を少しでも確保できるような対策が必要だという こと。森びとプロジェクトが応援しているいのちを 守る森の防潮堤づくりは、その役割をきっと果たし ていくと思う。そしてもう一つ大事なことは、人工 物が巨大災害の際、被害を拡大させていた事実であ った。私は、強固な防御対策にばかり関心が向き、 このことには今まで気づかなかった。今後の防災の あり方を考える際、大きな問題提起となった。

最後に、私たちを受け入れ心のこもった交流の機会を作っていただいた応援隊及び森びとプロジェクト福島県ファンクラブの皆さんに心から感謝を申し上げます。

秋田市議会議員 工藤新一



南相馬の植樹地にて



# ●足尾町・中倉山のブナ保全に参加して

友人に声かけられ、文化の日「孤高のブナ」に会いに行きました。関心があった足尾でしたが「孤高のブナ」の存在は知らず、久々の登山は辛かったですが、色々な方との出会いに感動しました。何度も袈裟丸や社山から足尾の山を眺めて裸の山々と思っていましたが、稜線までの道には草木が生え、笹が生えている稜線にポツンと生きているブナを見て私は感激しました。また、山歩きをしながらの会話、ブナとの出会い、この活動に賛同されている方々の話を伺い、私は感銘しました。この感激を伝えたいと思い、ブナとのツーショットを年賀状に使いました。

参加した「いちご一会とちぎ国体」のボート競技の時、審判の方々と「この遊水池は足尾銅山鉱毒の産物なんだ」ということを改めて認識しました。素晴らしい機会をいただいた私は、栃木を、足尾を、自然環境を真剣に考え、伝えていきたいと思っています。

栃木県 大垣圭子



孤高のブナと大垣さん



ブナの根を守るための土留め作業



エコメッセのみなさん

#### ●足尾での記念植樹、森の観察に参加して

NPO エコメッセは、足尾の山に植樹する活動を、 宮脇昭先生の講演会をきっかけに 2005 年から 2014 年まで5回を行ってきました。今年 11 月エコメッ セ 20 周年記念として、BDF (バイオディーゼル燃 料)のバスを貸切り、再び足尾の山に向かい、参加 者全員で苗木5本を記念植樹しました。そのあと皆 で森の観察会に分かれました。私は臼沢の森の観察 会に参加。「木は根。根は土づくりから。土の中にサ サラダニやミミズが土壌を分解して、栄養たっぷり の有機物を細菌が無機物にして樹木が吸収、そして 太陽光で光合成をして、CO2排出対策になる。自然 の大きな力で樹木からの有機物の恩恵を私たち人間 もいただく」等の説明を聞き、森の中で自分たちが 取り組む「資源の循環」の意味と向き合いました。 森の観察を通じて、森びとプロジェクトの 18 年間 の活動の成果、はげ山を蘇らせる森の再生の大事さ を目の当たりにしました。足尾の山は、秋色に染ま り、赤、黄色に色づいていました。以前より木々が 増えているとも感じた一日でした。森の中に入ると 見えてくる温もり、風やにおいを感じました。私た ちを快く受けいれてくださった森びとプロジェクト の皆さまに感謝!これからも地道な活動の継続をと もに考えていきたいと思いました。記念植樹の木々 の成長の様子もまた見に行きます。ありがとうござ いました。

NPO 法人エコメッセ理事長 大嶽貴恵



# 足尾架

# **足尾希!**中倉山の「無言の語り木(ブナ)」に耳を傾ける



「孤高のブナ」の前で

新年を迎え、今年の「中倉山のブナを元気にする 恩送り」活動を考えています。昨年11月、雑誌

『山と渓谷』で中倉山が紹介されました。それ以前からも中倉山登山者は大型バスで訪れる程に多くなっていると感じています。どうやら中倉山の稜線に生きる「孤高のブナ」がパワースポットになっているようです。推定120年は生きているブナであれば足尾銅山の負の歴史を宿しているということもあって、そんな中を生き抜いているブナのパワーが登山者の心を捉えているのでしょうか。

私たちは、4年前から草の種と黒土を混ぜた袋を中倉山に荷揚げし、その袋をブナの松木川側のガレ場に張り付けています。この活動を「中倉山のブナを元気にする恩送り」と称し、4月と11月の年2回実施しています。

草木には計り知れないパワーがあり、私たちの命はその恵みを得て育まれています。このパワーは草木が元気に生長していることが前提になります。これからも多くの登山者に命のパワーを授けてほしいと願い、私たちは活動しています。推定120年という樹齢からすると、今後100年以上は生き続けられると思います。しかし、「木は根、根は土がいのち」ですので、このブナがこの稜線で生き続けるには松木川のガレ場が拡大しないことが課題です。

 エネルギー、登山者の踏み跡等によるガレ場拡大は パワーを私たちに授けられなくなります。

パワースポットとしての「孤高のブナ」であってほしいと願うのには、このブナが少しでも長生きしていく環境を整えていかなければならないと思っています。100年以上前の人間の負の行為が、今では地球温暖化による想定外の異常気象としてこのブナの生存を脅かしているのかも知れません。もしかして、このブナが発しているメッセージには、"これ以上地球を温めるな!"、"命を守るエコシステムの母体は森ですよ!"ということも含まれているのかもしれません。

数年前、このブナの命をつなぎたいと願って実を 拾いました。芽を出してくれたのは僅かでしたが、 中倉山の麓の松木村跡地で育っています。日光森林 管理署のアドバイスを受けて、「孤高のブナ」の子 孫を遺したいと思っています。

人間の負の歴史は未来の財産にしなければならないと思っています。私たちは、このブナを「無言の語り木」と言っています。「負の歴史」を宿しているブナは生息環境の厳しい現代を生きています。ブナからいただいたパワーは動くことのできないこのブナに返していかなければならないと思います。今年は、「無言の語り木」が発信しているメッセージを受け止める私たちの心に、"森に寄り添って生きている私たち"という木を植えていきたいと願っています。

森づくりスタッフ 済賀正文



# **森の仲間たち** 私の身体に宿る森に寄り添うこころ



今回は「お茶会」に参加させて頂き、ありがとう ございました。栃木県立那須拓陽高校の OB とし て、我々を取り巻く環境の考え方、今後のボランテ ィア活動のあり方等、未来を生きる私の活動や心の 持ち方を改めて捉えるきっかけになりました。「お 茶会」に誘っていただいた池田先生には感謝してい ます。

興味を惹かれた話題は、「ボランティア活動とビジネスの関係について」でした。企業や地元産業が協力することで、既存のボランティアでは手の届かなかった範囲の活動をするために、より目標に近づくための活動が現実的かつ盛んになることがあるそうです。私は、社会人になった今でも地域の子どもを対象にボランティアを続けています。この活動が評価され、今年から別団体にバックアップしてもらえることになりました。サポート体制が手厚くなきとになりました。その団体の意向で運営側のボランティアメンバーに活動手当が出るようになりました。しかしているというです。その気持ちとは、「未来を生きる子どもたちには自分の時間や知恵を知ると、

無償で伝える時間と場が好き」という人生観みたいなことでした。活動そのものは変わらないのですが、ビジネスとの協力がボランティア活動のより良いひとつの形であるならば、いくつかのクリアすべき課題があると感じました。



私が環境保全活動に興味を持つようになったの は、小さな頃からの教育や経験の影響が大きいと思 います。自然が豊かな栃木県さくら市で生まれ、家のそばの川や草むらで虫取りや土遊び、小学校では 年数回、地域のボランティアの方と希少生物の保護 活動を体感し、学校の裏山では生態系について学ぶ 機会が多くあったからではないかと思っています。

自然に興味をもってしましたので農業高校へすすみました。そんな時期の2015年9月鬼怒川上流で大雨が降り、茨城県内の鬼怒川で氾濫が起こりました。私の実家も鬼怒川のすぐ近くにあり、少し違えば同じような災害が起きていたのではないかと、怖い思いをしたことを覚えています。その後、水害などを起こさない自然環境の能力が弱くなっていることを知り、その要因のひとつが地球温暖化であることがいます。その後も持続可能な未来のために積極的に活動する池田先生の下で、里山の生物多様性などに興味をもって、生物の生きる環境を考えるビオトープでの活動に力を入れてきました。

幼少期から高校時代を里山で過ごした私たちは殆ど変わらない自然環境教育を受けて育っていますが、多くの人は環境教育で培ったことが生活に活かされていない感じをもっています。10人に1人位は地域に居てほしいと願っています。現実的には、幼少期に育んだことは身体に沁み込んでいると思いますので、地域のボランティア活動を通じてそれが甦ってくると信じています。未来を生きる若い世代には、一人でも多くの方々と持続可能な社会を考え続けることの大切さをつなげていかなくてはならないと思っています。

栃木県 諸星幹也



# 生物社会に生きる心得 シリーズ④

"覚悟と勇気"・・・幸せは歩いてこない



写真:林子

昨年秋、国立環境研究所上級主任研究員、東大教授の江守正多さんが石炭火力発電を巡る民事訴訟(気候変動訴訟)の原告側証人として法廷に立ったことを新聞で知りました。記事には、二酸化炭素を大量に排出する石炭火力の新設を認めるような社会は持続可能ではなく、社会全体の仕組みやルールを変えていく必要がある、という彼の気持ちを報道していました。52歳のみなし公務員的な立場にあり、3人の子の父親でもある彼の生き様に私は感銘を受け、共感をもちました。

この記事を読んで私は、子供たちの将来を考えると、民事訴訟の原告証人になるには想像もできない 葛藤があったに違いないと思っています。江守さんの覚悟と勇気は微力ながら気候危機に向き合う私の活力になっています。彼の覚悟と勇気からは、万人の幸せのために個の利益を我慢するという生き方が強く感じられました。自国優先の経済活動に終始している各国のトップリーダーたちには人類の幸せのための"覚悟と勇気"を示してほしいと思います。

半世紀前、私は働く者の権利獲得のために法律で禁じられていたストライキに参加しました。当然なこととして、その後は賃金カットや不当処分を受けましたが、スト脱落者もなくストライキを貫徹できた歓びは私の生涯の精神的な財産です。

仲間たちが自主的にスト突入できるまでには、労 組リーダーと構成員の心をひとつにする信頼関係づ くりに3年間を要しました。労組幹部に裏切られて きた経験のある大先輩からすれば、再び若造に騙されるのではないかという不安が根強くあったと思います。このような中で、職場外での様々な付合い、スト決行中では、スト突入者への激励やスト突入に悩んでいる仲間との厳しくも優しい激論、その他の時間は同じ釜の飯を交代で作り、食べてきました。この過程で、「ストライキ態勢を維持するためには身勝手な行為は自粛する」という意識が培われてきたのだと思います。当時を振り返ってみると、個人や目先(個)の利益は我慢し、働く者の権利獲得を第一にするという意識が芽生え、働く者の覚悟と勇気という精神が培われたのではないかと思っています

昨年閉会した COP27 は、国連が締約国にノーを 突き付けたように、その宣言は「やっているふり」 をしているゼロ宣言で終わりました。「自ら(二酸 化炭素を)大幅削減せずに、安い排出権を購入して 削減したとみなしてはならない」等とする国連のコ メントの意図は、人類の幸せを第一にした覚悟と勇 気を締約国に突き付けているのではないかと受け止めています。自国ファーストの政治から地球びとの 政治へ改めさせる運動をつくりだす覚悟と勇気が今 年のキーワードにしなければと思っています。幸せ は何もせずに待っていても、誰かを当てにしても歩 いてきません。幸せは意思した者がつかみとるもの ではないでしょうか。

顧問 髙橋佳夫



# **心のふるさと探**し 森に寄り添った余生に感謝します



昨年11月、私は80歳を迎えました。森づくりの仲間たちには傘寿の祝いの場をつくっていただき、皆さんの激励を賜わり感無量のひと時を過ごすことができました。定年後から10数年間も森づくりにかかわれたことに感謝していますが、その気持ちを振り返ってみました。

昔、祖父が家督になるべき孫を連れて山に入り、 混在する木々を指さしながら、薪や炭にする木、建 材にする木とその用途を教え、森と森の境界も教 え、木は売っても山を売るな、木を伐ったら植えろ ということを声高に言っていました。中学生になる と炭すご(萱などで編んだ炭を入れる俵)一俵に杉 の葉を入れ、もう一俵には木の葉を入れて学校に持って行き、それらは薪ストーブの焚き木と堆肥にしていました。当時の家は木造茅葺で、暖房は薪と炭を燃やし、炊事も薪とモミガラという生活様式でした。今思うと当時の生活で消費してきたものは自然 界に戻らないものばかりでした。

社会人になり、蒸気機関車の掃除からはじまってレール上を走り、最後は、電車の掃除をした後に余生のんびり過ごそうと思っていました。そこにNPO森びとプロジェクト委員会の訪問を受け、森づくりを手伝うことにしました。足尾の荒廃地を見て唖然としましたが、森びとの先陣たちは宮脇先生の教えを無心に実践している姿を見て、それに加勢しているかのように木々が山肌を森にしていました。そこには、"木は根、根は土、土がなければ運べばよい。心にも木を植えよ"との合言葉を言いあいながら、気の遠くなるような森作業を無心に続け

ていました。仲間たちには"足尾の森の主"と言われていますが、嫌な気分ではありません。振り返ってみると、私も自然体で無心になって森づくりを続けられてきました。どうやら私の心身には幼少時代の生活で培われていた"自然界に寄り添って生きる魂"が宿っていたのではないかと思っています。同時に、ともに森づくりを愚直にすすめている森ともの優しくも厳しい人間性に支えられてきたからだと思っています。

森づくりに夢中になれた 10 数年間はあっという間でした。いのちを守る自然界の循環システムの母体である森の手入れをできたことに感謝しています。人は森に生かされている以上、森の手入れをすることが私たちの責務であると思います。その過程に、森は人間の都合では育たないことを教えてくれた足尾の森づくりに感謝しています。最後に、森づくり現地で私を適材適所へと導いてくれた皆様に感謝し、森の手入れをする気持ちの一定の区切りとします。

森づくりサポーター 鎌田孝男





#### 森は友だち

「グリーンウォッシュ」という言葉があります。これは、「グリーン(=環境に配慮した)」と「ホワイトウォッシュ(=誤魔化す、上辺を取り繕う)」を合わせた造語で、主に企業等が消費者の誤解を招く表現を使用し、環境に良いと思わせる戦略です。

昨年 12 月、政府はグリーントランスフォーメーション(GX)実行会議で、廃止原子炉の建替えや運転期間の延長等、既存の原発の最大限活用する方針をまとめました。国は原発事故後、「可能な限り原発依存度を低減する」とし、再エネを主力とする方針を示しつつ、CO2 の排出が高い石炭火力に固執し、"クリーンな石炭火力発電"を国策として進め、国民を騙しつづけてきました。さらに、ロシアのウクライナ侵攻により、温室効果ガス排出が増加し、エネルギーの供給が不安定なことから、世界的にも化石燃料や原発への回帰の動きが出てきています。それに乗じて、電力不足を煽り、原発の稼働や新規建設、運転の延長を満を持して打ち出してきたことになるでしょう。産業革命以前の水準から気温上昇を「1.5℃」以内に抑えなければ、熱波や豪雨など気象の極端現象が昨年よりも深刻になり、安心して暮らしができる生存基盤が揺らぐ崖っぷちに来ています。福島第一原発事故から間もなく12年経ちますが、被災をされた方々は未だに苦しんでいる現実を無視した残酷な方針ではないでしょうか。いのちが脅かされる現在、気象の極端現象に対して原発や化石燃料が解決策にならないことは明白です。真実を見極め、傍観者や他人事でいてはなりません。今年は社会の仕組みを変えるために行動する年としたいです。

運営委員 小林敬

編集 後記 森びとの足尾での植樹は一段落してしまいました。森びとがお借りしている土地をほぼ植え切った、というのが一つ。新たに借りて植える場所がない、というのがもう

一つの理由です。

足尾の場合、植え方はもちろんのこと、シカを始めとする獣害(害というのは人が勝手に決めたものですが)があって、植えるだけでは育たない、という難しさがあります。ネットなどで植樹地の保護が必要で、それを作るのもひと手間ですがメンテナンスもとにかく大変だったりします。土砂崩れや落石、シカの体当りクマの乗り越え、様々な要因でその修正が必要になるのですから。侵入されたら苗木のほとんどが食べつくされてしまう運命なので、のんび

りしているわけにも ことを考えると、おいて 単には言い出せない のかもしれません。で もねぇ。まだまだ荒地



ばかりじゃありませんか?足尾。知らない人は夏に来ると森になった、なんて言いますけど、実際はまだまだ立派な荒地です。

世界中の植えられる場所を森にすれば、気候変動の影響は随分緩和できると言われています。いっそ森びとだけなんてケチなことは言いませんので、みんなで木を植えましょうよ。なんなら日本中で!! 「植えた木は今日も炭素を固定中」

運営委員 小黒伸也

森の木魂(こだま)第9号(2023年1月24日発行)

Ux Forest People Project

発 行:森びとプロジェクト

発行人: 桜井勝延

編集人:森びとプロジェクト編集委員

第一版

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室

TEL&FAX 03-6417-3750

http://www.moribito.info/ Email info@moribito.info



